

県史跡「一宮城跡」の発掘調査について

1 一宮城跡とは

一宮城跡は、吉野川の支流鮎喰川の流れが山間部から平野部へと変わる付近の南岸山塊に位置しています。眼下には鮎喰川が流れ、背後に東竜王山系の急峻な峰々を控えた天然の要害です。また、東方向に紀伊水道、北東方向に鳴門海峡が望見でき、徳島平野の東部をほぼ一望できる立地にあります。

一宮城は、阿波守護小笠原長房の子長久の四男長宗が、南北朝時代初期、暦応元年（1338）に築いたと伝えられています。その後、小笠原長宗の子孫である一宮氏が在城したとされ、戦国時代には一宮氏の山城として整備され、細川氏、三好氏、長宗我部氏の攻防の舞台となります。

天正10年（1582）に阿波を制圧した長宗我部氏は一宮城に兵を配し、豊臣氏の四国平定に対する防衛の拠点としますが、豊臣秀吉に降伏した後は、阿波に入国した蜂須賀家政の最初の居城となります。この際に阿波支配の拠点として改修を始めるものの、約一年で徳島に本拠を移すこととなります。その後、蜂須賀氏が領国支配の安定を図るため領内の要衝地に配置した9つの支城（阿波九城）の一つとして城の機能を維持しますが、元和の一国一城令（1615）を受けて廃城になったとされています。なお、現在残る本丸石垣等の城跡は、蜂須賀氏が居城としてから廃城となるまでに整備されたものと考えられています。

2 一宮城跡国史跡推進事業について

現在県の指定史跡である「一宮城跡」は、阿波の中近世史上欠かすことのできない重要な遺跡であり、徳島県中世城館跡総合調査においてもその規模と良好な遺構の保存状態が高く評価されています。麓には重要文化財建造物一宮神社本殿、日本遺産の四国遍路を構成する13番霊場大日寺があり、一宮城跡はこれらとともに地域を象徴する歴史遺産です。また市内で最も古い保存会（昭和29年発足）があり、清掃活動には毎回多くの住民が参加するなど、住民との距離が非常に近い史跡です。今後、一宮城跡を地域づくりの核として整備し、活用するために、徳島市では、平成29年度より一宮城跡国史跡推進事業を実施しています。

事業目的：発掘調査や文献資料調査といった総合調査を実施することで、一宮城跡の価値をさらに高める。

調査内容：発掘調査、測量調査、石垣調査、文献調査、地籍図調査、石造物・寺院調査など

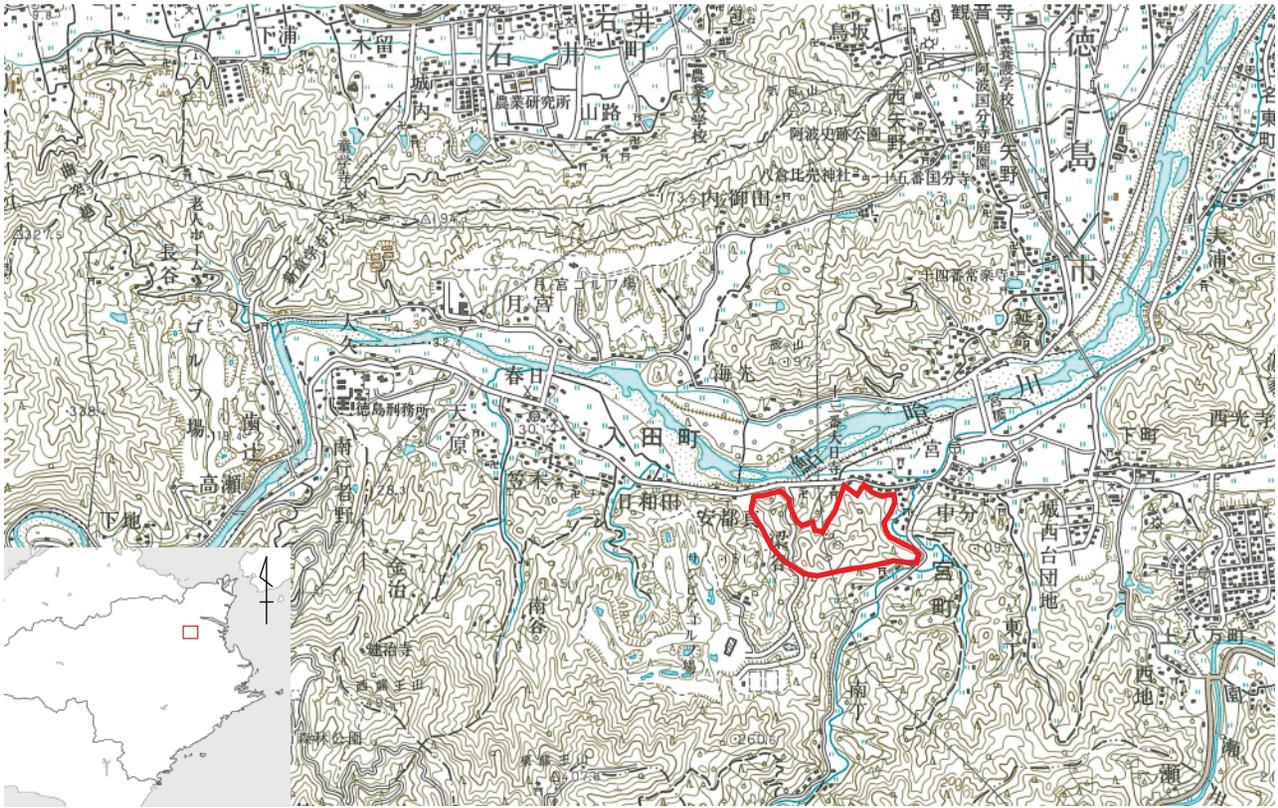
事業期間：平成29年度～令和3年度（5カ年）

3 令和元年度の発掘調査成果について

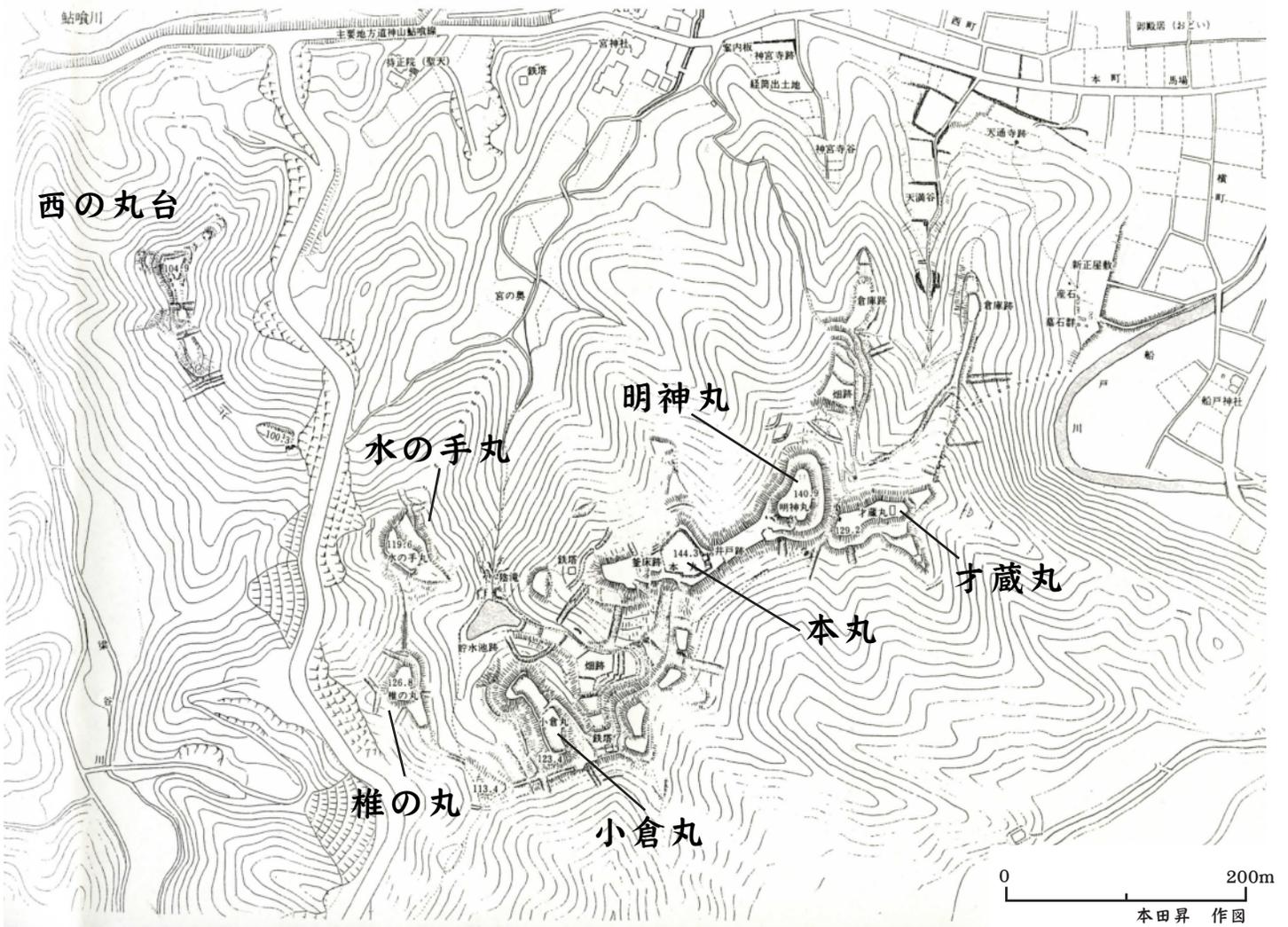
調査の成果として、東西4間、南北4間の建物礎石が確認されました。礎石の多くは山下から運び上げられた比較的厚みのある円礫を用い、岩盤を削って設置しています。また、一宮城跡では瓦が全く出土していないことから、本丸の礎石建物と同様に板葺きの屋根構造をもつ建造物であったと考えられます。明神丸の造成に伴う盛土内からは、京都系土師器皿や中国産の輸入陶磁器（白磁碗、染付皿）、肥前系磁器皿などが出土しています。出土遺物の年代観は16世紀代から17世紀前半を示すことから、明神丸の曲輪や建物跡は蜂須賀家政が一宮城を居城にしてから一国一城令による廃城までの間に整備されたものと考えられます。

～Memo～

--

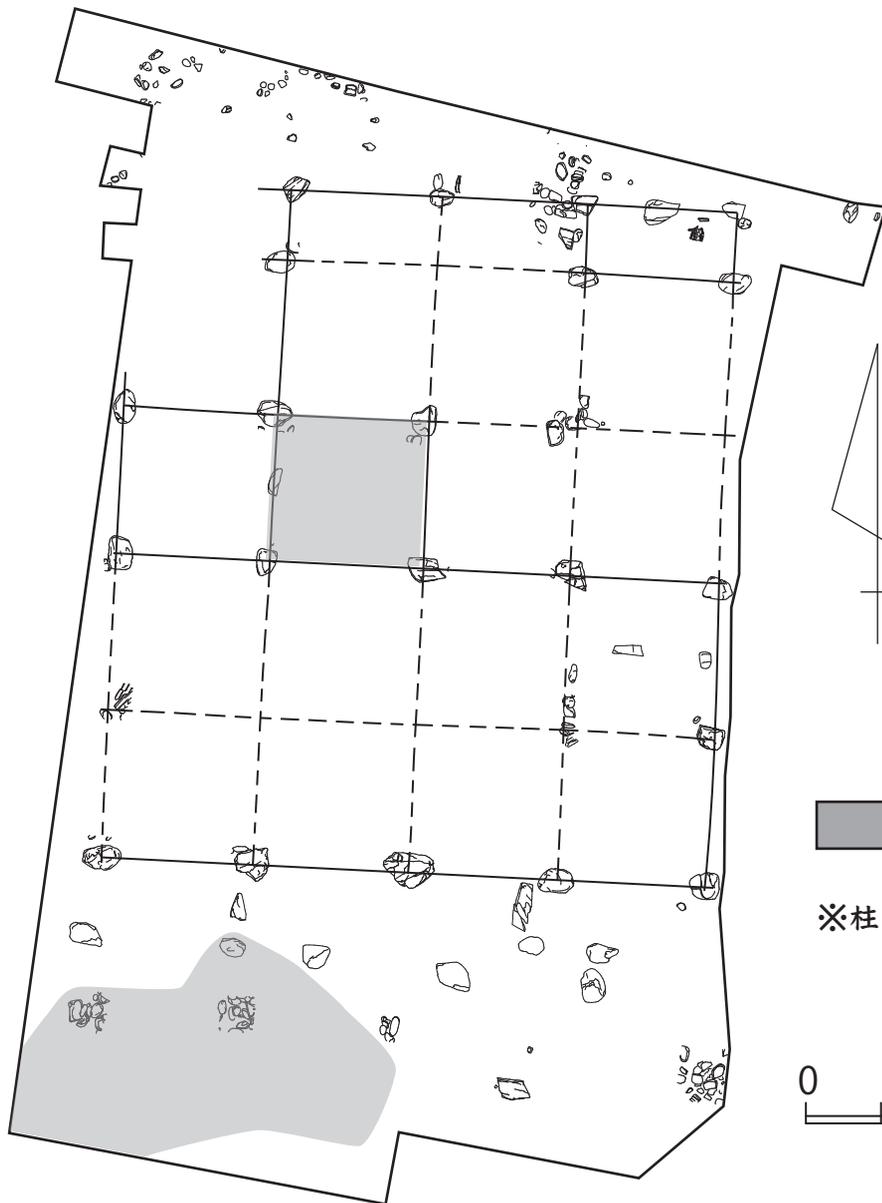
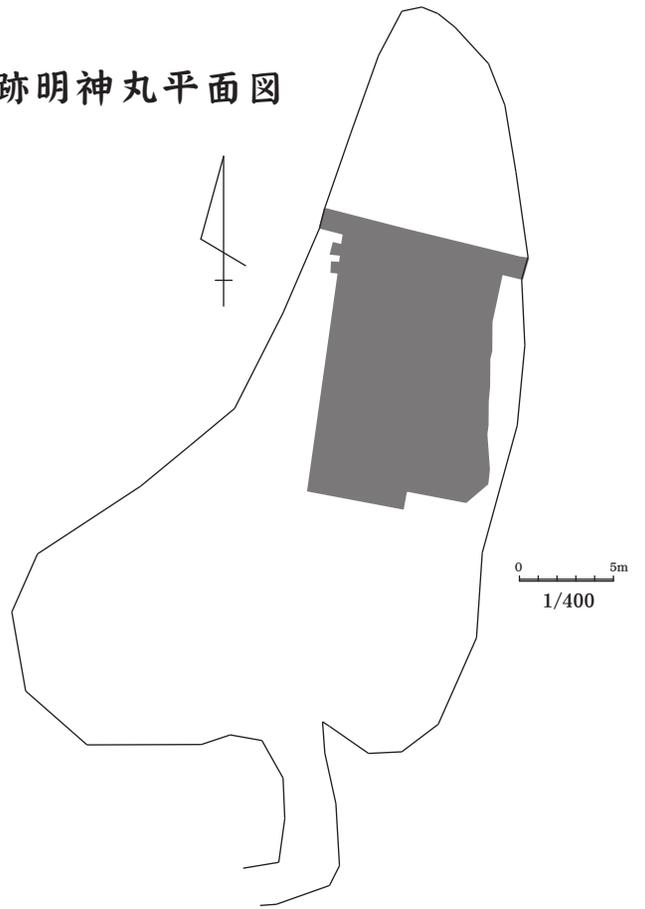


一宮城跡位置図 (1/50,000)



一宮城跡縄張図 (一部加筆)

一宮城跡明神丸平面図



石敷き遺構

※柱間寸法：1間≒6尺5寸（196cm）

一宮城跡第4次発掘調査（令和元年度）平面概略図